

## トマス・ホジスキンの「共存する労働」と貨幣・信用

姫野, 順一

<https://doi.org/10.15017/2920589>

---

出版情報：経済論究. 44, pp.109-130, 1979-01-20. 九州大学大学院経済学会  
バージョン：  
権利関係：



# トマス・ホジスキンの 「共存する労働」と貨幣・信用

姫 野 順 一

## 目 次

は じ め に

第1節 「共存する労働」概念の特質

第2節 「共存する労働」と分業・トレード

第3節 「共存する労働」と貨幣・信用

む す び

## は じ め に

トマス・ホジスキンの<sup>(1)</sup> (Thomas Hodgskin 1787—1869) は、19世紀初頭、社会の根底的改編をともしつつマニュファクチュア段階からファクトリ段階へと移行しつつある産業革命推進中のイギリス資本主義社会にあって、労働者の貧困という新しい社会問題に関心を注ぎこれを論じた特異な思想家である。

ところで、ホジスキンの最近の研究は大別して二つの見地からこの内容を明らかにしてきた。第一は『労働擁護論』(Labour Defended Against the Claims of Capital, or the Unproductiveness of Capital Proved with Reference to the Present Combination Amongst Journeymen, London 1825 [Kelley's reprint 1963] 安藤悦子訳「労働擁護論」『イギリスの近代経済思想』所収)を中心として、資本の本質にたいする諸洞察の意義と限界を考察するものであり、第二はホジスキンの思想形成過程を重視し、その資本主義批判の歴史的、社会的な意義を問うものである。

玉野井、平尾教授に代表される第一の研究<sup>(2)</sup>は、ホジスキンの資本の不生産性を証明するさいの固定資本、流動資本についての鋭利な言及をとりあげ、それがどこまで利潤の源泉の本質的解明にせまったかを理論的に明らかにし、そのもつ限界を自然法思想にもとづく労働全収権思想<sup>(3)</sup>にもとめた。この研究により、ホジスキンの学説は資本制生産の構造分析に果す役割を高調されたが、ホジスキンの諸説がどのような時代的実践的意義をもっていたのかという点についての究明は、残された課題とならざるをえなかった。というのは社会思想的見地も当時の歴史的、社会的条件の中で構想され発展されるものであり、経済理論の性格もこれに規定されざるをえないからである。いうまでもなく第二の研究はこの問題を全面的にとりあげる。

鎌田教授は、ホジスキンの『海軍紀律論』(An Essay on Naval Discipline, showing Part of its Evil Effects on the Mind of the Officers and the Mind of the Men and on the Community: with an Amended System by which Pressing may be immediately abolished, London, 1813), 『北ドイツ旅行』(Travels in the North of Germany, describing the Present State of the Social and Political Institutions, the Agriculture, Manufactures, Commerce, Education, Arts and Manners in that Country, Particular in the Kingdom of Hannover, 2 Vols., Edinburgh 1820) から『労働擁護論』、『民衆の経済学』(Popular Political Economy, Four Lectures delivered at the London Mechanic's Institution, London, 1827), 『自然的所有権と人為的所有権の対比』(The Natural and Artificial Right of Property Contrasted, a Series of Letters, addressed without Permission, to H. Brougham, Esq. M. P., F. R. S., etc. [now the Lord Chancellor], by the Author of Labour Defended Against the Claims of Capital, London 1832) にいたる資本主義批判思想の形成、発展、推移を跡づけ、それを諸事件、社会問題と絡めて吟味し、それとの関連で経済理論の歴史的な性格を浮彫りにされた。この研究によりホジスキンの経済社

会についての所説の歴史的、形成的性格は明徴されたが、その場合鎌田教授のつぎのような分析視角が目を引く。「社会思想が主観的直観から主体的感性へと発展するなかでどのように理論的に整序されていったか、ということが追求されなければならぬが、この問いには結局経済社会全体の運動法則をどの程度客観的に把握しえたかを明らかにすることにより答える。<sup>(5)</sup>」つまり鎌田教授は、ホジスキンの社会思想の歴史的、形成的過程をとりあげるが、その発展として整序される経済理論の評価に関しては、平尾教授と同じくどこまで客観的運動法則にせまったかどうかという観点にたたれている。

それにしても経済理論というものも歴史的、形成的なものであり、とすれば経済を歴史的にする諸問題が経済理論と絡めて具体的にとりあげられることにより、鎌田教授の問題提起も正しく生かされてくるように思われる。以下、先学の研究に導かれながら、『労働擁護論』および『民衆の経済学』に铸込まれた歴史的 content と、その铸込まれ方をさぐってゆきたい。

### 第1節 「共存する労働」概念の特質

ホジスキンの『労働擁護論』および『民衆の経済学』を著わした1820年代のイギリス資本主義は、産業資本の確立過程にあったが、産業革命はなお進行中であり、「手職工の没落」<sup>(6)</sup>にみられるように、機械の採用は労働者の熟練を奪い、機械過程への包摂が進むとともに「社会問題としての貧困」が新しい様相を示し始めていた。すなわち、この期の労働者の貧困は、機械制大工業を軌軸とする資本制生産の確立過程が小生産者層を没落させるという内実を残しながらも、25年恐慌時には資本制生産そのものの生み出す「貧困と難況」が、人々の目に映じ始めていた<sup>(7)</sup>。

この時代、資本制生産の永遠の発展を理論化したリカードの『経済学および課税の原理』(On the Principles of Political Economy, and Taxation, 1817)における資本蓄積論は、J・ミル、マカロックにひきつがれ、資本制的な再生産を経験的に理論化するものとして発展させられていたが、ホジスキンの

は、『労働擁護論』のなかでこの理論にたいし、「利潤の要求を基礎づけ、かつ資本および資本蓄積を人間進歩の主動因として、われわれの行政府にたいしてつきつける理論は、わたくしの意見では労働者がみずからの利害にしたがって検証しなければならない理論であり、そのうえ、労働者がつねに自分たちの状態を改良していくなんらかの望みをもちうるためには、論駁することができなければならない理論である」(Labour Def. p. 28, 邦訳347ページ 以下ページ数のみを記す)と疑問をなげかけている。ホジスキンは明らかにゴドウィン段階とは異なった、そして10年代とも異なる資本蓄積の生み出す新しい貧困にたちむかっているのである<sup>(8)</sup>。

それでは、この検証、および論駁の内容はどのようなものであったのか。

彼はマカロックの「固定資本と流動資本の両者の蓄積と使用は、どの国民でも文明度をたかめるのに、絶対に必要である。そして富が十分に生産され、くまなくゆきわたることができるのは、この両方の資本の結合した強力な作用によるのみである。」という見解<sup>(9)</sup>、さらには、J・ミルの「労働者は、原料も道具もどちらももっていない。これらは、資本家によって、労働者のために配慮される。この配慮をすることによって、資本家は、当然ある報酬を期待する」(傍点はホジスキンの引用文でイタリック、以下但書のない傍点は引用者による)という見解に、資本蓄積の弁護論をかぎとり、この資本生産力論にたいして「資本に帰属するとされているすべての利益は、共存する労働(co-existing labour)と熟練した労働 (skilled labour) から生じるというのが、著者の意見である。」(p. 19, 343ページ)と主張している。

その場合、マカロック等の流動資本、固定資本観に反対する論理はこうである。「流動資本の唯一の利益は、それによって労働者が自分の能力を最大の利益にむけることができるということである。なぜなら、かれは、自分の現在の生計が保障されているからである。かれは、技術を学ぶ時間を持ち、そしてかれの労働は熟練をもって実施されるとき、はるかに生産的になる。当面の生計が保証されるなら、かれは、自分の特殊な知識と習得技能によって、かつ社会

の欲求に関連して、かれが最上の労働方法であるかを確かめることができ、そのうえかれはこの方法で働くことができる。」(pp.36—7, 351—2ページ) つまり、ホジスキンは、労働者が技術と熟練を習得し行使するのに専念するための「生計の保障」を行うのが「流動資本」の効力であるというのである。ここでホジスキンは「流動資本」とは物、つまり資本家のでもとに貯えられた財貨ではなく、人間の社会的に結合した労働の発揮であると主張したいのである。ホジスキンはマカロックや J・ミルが「物を資本となすところの特定な独自の形態と、物としての、そしてすべての労働過程の単純な要因としての物の属性とを混同<sup>(10)</sup>」して概念している「流動資本」に反対し、これを「共存する労働」と読みかえ、独自の意味を付与しているのである。

それでは「固定資本」についてはどうであろうか。彼はいう「固定資本は、労働者がそれで働く道具や用具、労働者が製作し、動かす機械、および労働者が自分の仕事を容易にするかまたは自分たちの生産物を保護するかに使用する建物からなっている」(p.52, 360ページ) が、「一国民が固定資本をもち、かつそれをうまく利用するためには、三つのことが、しかもたった三つのことが必要であるようにわたくしには思われる。第一は機械を発明するための知識と発明力である。……第二に必要なことは、これらの発明を実行にうつすための手先の熟練と器用さである。第三に必要なことは、これらの諸用具がつくられたあとで、それを使用する熟練と労働である。」(pp.63—4, 366—7ページ)、「固定資本の所有者に利潤をもたらすのは、それが貯えられてきたからではなくて、それが労働にたいする支配を獲得する一つの手段だからである。」(p.55, 362ページ) と。つまり「固定資本」はたんなる物であるが、物を有用的にするのは労働者の知識、熟練、労働であって、利潤が生み出されるのは、この有用な要素と関係のない支配による、というのである。ここでも物に力点をおき、利潤取得の権利を所有＝貯えられた労働に求めるマカロックや J・ミルに対し、生きた労働が強調されている。

このようなホジスキンの資本批判の意義と限界については、従来つぎのよう

に評されてきた。ホジスキンは論敵と同様に資本の価値生産性と使用価値生産性を区別せず、経済学者たちが生活資料や生産手段などの物をそのまま資本とみなすという物神崇拜的な観念に対抗して、生産における物的要因に対して、生きた労働を強調し、そのような議論の結果、資本の本質に近づいたが、利潤がいかなる経済機構を通して資本家に取得されるかを説明していないと(11)。客観分析の視角からのものとして肯首できるものである。たしかにホジスキンはミルやカロックの物神的観念を批判したが、労働の二重性を理論的に明らかにし、資本制生産の構造をときあかすことはできなかった。しかしながらホジスキンの20年代の労働者の貧困という具体的、歴史的事実を前提にして立論していることも無視できないように思われる。たしかに、ホジスキンは、この労働者の貧困を機構的に解明するものではなかったが、「共存する労働」というホジスキンの概念が、現にあるものを抽象する概念ではなく、ホジスキんに独自の人間的、文化的意味の込められた概念であることが注目される。つまり、ホジスキンの「共存する労働」の概念には、現状の矛盾とのかかわりで未来を展望するホジスキンの願望が込められているのである。

彼は、この内容として、機械を発明する知識と、その発明を実行に移す熟練、そしてつくられた機械を動かす労働の三つの要素の一体的結合を指摘していた。この点でホジスキンは、スミスの時代ではなく、機械が生産に充用されるようになった19世紀の労働についてのべており、19世紀に固有な人間的進歩思想の見地になつものといえるのである(12)。

『民衆の経済学(13)』では、この人間的進歩は経済的進歩と結びつけられ歴史観の要となっている。すなわちホジスキンは社会の経済的進歩を人間の知識・熟練・発明の才と結びつけ、次のようにのべる。「かくて、地上の自生的な生産物が使い尽されたので、飢餓が人間の創意を刺激し、そして彼は猟師あるいは漁師となり、その群は原野のまっただなかに、あるいは魚が豊富であると思われた川の近くになげだされた。人間の数が増加するにつれて、またもこれらの諸資源は不足し、そこで同様の欠乏はさらなる諸改良を招来した——まず粗

野な種類の農業を、その後粗野な製造業を、それに続いて手のこんだ耕作およびわれわれ自身の時代のすばらしい諸発明を招来した。」(Popular Pol. p.85.

以下ページ数のみを記す)

つまりホジスキンのにとって歴史とは「諸改良」の継起的発展であり、人間的進歩＝経済的進歩なのである<sup>(14)</sup>。このような進化論的歴史観<sup>(15)</sup>が産業革命の生み出した技術的改良にたいする信頼を内実としていることは疑いない。ホジスキンのにとって「馬で2万頭、人で224万人に相当する」ところの蒸気機関の発明、「6人の人が150人分の仕事をし、28万人ないし35万人の労働者を雇用する」綿工業機械の発明、鉄の採鉱、溶解、鋳造の改良、新穀物の導入、耕作方法の改良、鉱山で使う安全灯の発明といった産業革命の成果は「共存する労働」の偉大な所産にほかならず、さらに人為的な「社会的諸制度」も改良の対象とみなされ、ここから「労働者の貧困」という社会問題も改良される現実と把握されているのである<sup>(16)</sup>。

それでは、どのような改良が「労働者の貧困」を解決するというのか、節をあらためて吟味してゆこう。

## 第2節 「共存する労働」と分業・トレイド

ホジスキンは「文明社会で生じる、occupation, trade, business への専業」を分業とよぶのであるが、この分業に次のように接近している。「生産力を増大するものとして、スミス博士が明瞭に示した唯一の事情は分業である。彼の後継者たちは、これに資本の蓄積をつけくわえてきたけれども、生産に影響し、これを規制する自然的な諸法則の説明には、これまで何の進歩もなされてこなかった。」(p.54)「資本の蓄積および充用を規定する諸法則は、知識の進歩を規定する諸法則とは、まったくあいられない」(p.78) このように生産力を分業に帰するスミスを、高く評価し、生産力を「資本蓄積」に結びつける経済学者たちに対して、スミス以来の生産力の発展は「資本蓄積」とは関係なく、「知識の進歩」によってもたらされたと主張しているのである<sup>(17)</sup>。ここには、資本蓄積そのものを労働者の貧困の原因であるとする、ホジスキンの意識が反映さ

れている。そして、ホジスキンは、「全ての生産力がおどろくほど増加させられるところの、諸個人の間での分業と、一つの共通の結果を生産するための、さまざまな種類のすばらしい協同 (co-operation) は、崇高および一般的富裕——これは、われわれにとって最も重要であるのだが——という効力を先見し、願望しているところの人間の、つまり立法的英知の結果ではなくて、人間における本能の所産である。……政治経済学が主要に取扱うのは、これらの自然的な関心、本能および感情と、それらの諸結果である。」(p.25) と説明している。つまり、人間の創造本能ともよぶものは、立法的な英知＝「資本蓄積」とは無関係に、「共通の結果」を生み出すところの「労働者の協同」をつくり出す、というのである。

このような分業観には、スミスの分業観の読み変えがみられる。周知のように、スミスは「交換性好」を分業の発生原理としたが、ホジスキンは、この発生原理を「創造本能」にもとめている。スミスは、分業の生産力が現実に発展するのは、資本が登場してからの「文明社会」でのことであるとし、資本蓄積を分業の中に組み込んでいたが、ホジスキンは、この資本蓄積と分業を切り離し、文明を進歩させるものとして「知識の進歩」という新しい概念を分業につけ加えているのである。つまりホジスキンにとって「文明」とは「知識の進歩」のことであり、それは「労働者の協同」でなければならなかった。

ところで、スミスが「交換性好」を分業の発生原理としたことには、客観的な商品交換、それも「文明社会」である資本制的商品交換から概念を抽出するという、いわば経済の自律性を前提とするところの、重要な経済学的認識が含まれていたが<sup>(18)</sup>、これに比べ、ホジスキンが「文明社会」の分業の発生原理を「創造本能」にもとめたことには、ホジスキンなりの理由がある。すなわち、彼は現にある「文明社会」の資本蓄積をうちに含む分業をそのまま抽象するのではなく、そのような見地に反撥し、あるべき分業の構想を目指したのである。ここで知識、熟練、労働の一体的な結合であった「共存する労働」は分業論として発展させられている。

それでは、この内容はどのようなものであったのか。彼は分業の生産力におよぼす影響を第一に労働の特化によって高まる熟練と器用さ、第二に仕事が同一作業場（work house）で行なわれることによって節約される時間、第三に特化された労働から生み出される機械、および労働を集約するための過程<sup>(19)</sup>の発明の三つをあげている。このことのホジスキンの独自の意味は次の現状認識の中に含まれている。「自分たちが行使する新技術をもたらしただけの多くの現代的な諸発明によって、技術者（雇い職人）とよばれるあの多くの人々から構成される階級が、いくつかの新奇な種類の他の現代的な職業に従事する人々、つまりこの国のあらゆる部分で気づかれるほど増加しているところの、たとえば、力織機だけを製つたり、あるいは力織機だけで労働し、他のいくつかの事業を崩壊させ、同職組合や徒弟法に死の打撃をあたえている人々と共に、他の労働者から分離させられてきた。」（p.80）この、産業革命が生み出した、現代的な諸発明、諸技術によって、古い労働者および、そのワク組であった同職組合と徒弟法<sup>(20)</sup>をうちこわして登場した「新しい階級」、すなわち雇用されている、職人的な技術者、機械づくりに専業する労働者、機械労働のみに専業する単純労働者の結合、これがホジスキンの「共存する労働<sup>(21)</sup>」＝分業の主要な内実であり、これらの「労働者の協同」を希求したのである。

このホジスキンの改良の理念は、こうである。「諸個人が与えられた仕事を短かい時間で、あるいは大変容易に完成できることに気づくところの分業は、トレードすべての中で、それゆえ社会全体の中で、作用しているときには、比例的に有益でなければならない。とわいえ、見落してならないことは、労働者に自然に集中するこの慣行のすべては、彼に帰属し、そして彼の安息に貢献し、あるいは彼の富裕を増加させる。」（pp.107—8）つまり、生産力の成果が生産者に比例的に自然に環流することが当為命題として語られている。こうして、資本関係を理論的前提としたマルサスの『人口論』（An Essay on the Principle of Population, 1798）での貧困不可避論に対し、独自のモデルの中でこの貧困を解決した<sup>(22)</sup>。

ところで、この理念はオーエンやブルードンの立脚する機械過程＝工場内での結合ではなくて、「共存する労働」であったことがここで想起されねばならない。というのは、ホジスキンの分業から除外されているのは、「富者」(rich)すなわち「横領や強奪」を法的権力によって遂行する所有者であり、「資本蓄積」および資本家は、そのような属性において分業の外におかれたが、分業は相互交換によって結合されねばならないとして、「トレード」がこれに含まれているからである。次にこの内容を吟味してゆこう。

ホジスキンはこの時代の商業の状態を次のように指摘している。「現在では商人は自分の行動を、財貨の貨幣価格によって、交換比率によって、立法者の法規によって、そしてこれらの法規がつくりだした事物の強制された状態によって規制している。」(p.167) ここで、法的な強制という視点からではあるが、資本制生産の下での市場の現実には注意がむけられているのである。

ホジスキンの「トレード」論は、このような市場の現実について展開されている。その内容は次のようなものであった。

まず「トレードとは卸売業(wholesale)であろうと、小売業(retail)であろうと、農業や製造業と同じく、分業から生じた、社会における諸個人の諸々の職業や事業が分類される、三つの主要な項目の一つである」(p.140) とされている。いうところの「小売業」とは、好みや性向の相違により発生する「個人間分業」(individual division of labour)を活動分野とし、「労働者あるいは、製造業者といった、さまざまな諸階級から種々の生産物を購買し、全員の諸欲望に最も適合するようにこれらを分配する。」(pp.148—9) ものであり、「卸売業」とは、これにたいし、様々な土壌、気候、自生的な生産物といった地理的、環境的な相違から発生する「地域間分業」(territorial division of labour)を活動領域とするもので、このような「商人の活動は、最も利己的な動機から生じているのだが、それらは自由に放任されるときにはいつでも、季節的な変動を平準化し、相等的労働で全文明社会、つまりあらゆる種類および身分の人々にたいして生計と享樂とを拡大するという直接的な傾向がある。」(p.179)としている。

ホジスキンはここで重商主義の時代の商人のことをのべているのではなく、明らかに国内、国際的に商業取引の広がった、そして自由貿易が論争となっているような、19世紀初めの商人の活動を前提として議論しているのである。この現実の商業活動が歪められているという認識は、当時商業のもたらす弊害を強く批判していたオーエンと同じである、が、ホジスキンは、商業活動それ自身のなかに弊害の原因を求めている。いいかえれば、オーエンが盲目的利潤追求の責を「商業の原理<sup>(23)</sup>」にもとめたのにたいして、ホジスキンは、商業そのものを孤立的、一般的にとらえ、活動に即して、単純流通の、予定調和の理念に組み込んでいるのである。「彼の利己心というぬけめのなさが、不断に警戒を続けているので、彼が利潤を得ることができるのは、彼の活動が需要と供給を均等化する場合だけである。」(p.175) と。つまり、「トレイド」は予定調和が前提されたうえで、利潤を追求する商業の活動により論証されているのである。そこには商業資本の活動の有用的、機能的側面は承認しながらも市場における、社会的、総体的な商業資本は否定されるという構造がみられる。

ホジスキンによれば、この「トレイド」とは何よりも「インダストリ」にもとづく等価交換でなければならなかった。「われわれが商品を手に入る人々は、それがどんな種類のものであったとしても、我々に商品を与えはしない。逆に彼らはそれらとひきかえに等価、あるいは等価よりも多いと評価するものを受けとる。というのは、彼らには等価の方が交換する商品よりも好ましいからである。しかし、この等価はそれが何であれインダストリによって作られ、売られる。労働の生産物でない富という生産物はない。その結果、等価の商品を生産し入手するためには、それがそこから運ばれる場所において、輸入された商品を創り出すのに必要な労働とほぼ同量の労働を要する。」(p.161) このように労働を計測単位として、等価交換を主張し、ここから自由貿易を主張する点では、J・ミルやリカードウの比較生産費説を思わせるものがある。しかし、J・ミルやリカードウが、この生産費を資本制生産における生産費ととらえ、何よりも産業資本との関連で自由貿易を主張した<sup>(24)</sup> のにたいして、ホジスキンは

の「インダストリ」の見地は、産業資本の見地と一致するものではない。ホジスキンの「インダストリ」の見地は、一方における供給の過剰、他方における欠乏の存在という、資本制生産の現実の矛盾を理念的に克服する概念として、与えられている。と同時にこの理念の主張はホジスキンの、1820年代の資本主義の現実を次のように把握したことにももとづいている。「不幸なことにわれわれの時代には、誰もがその負担を隣人に肩変わりさせようとするほどの巨大な課税と、政府の都合次第で、あるときは金と交換でき、またあるときは交換できなかったりするような、紙券貨幣の変動のせいで、低俗な強欲や富くじを買う人がもつ精神とが全トレーダーたちを駆りたてる諸原理になってしまった。富をふやすためのペテン的組織が、社会のいたるところで採用されてきており、概して、わが商人たちは、証券の信用売買や賭博的投機によって金持ちになろうと努めている。富が富くじをあてることによって手にはいるときには、インダストリはまったくその魅力を失う。いまでは自然の秩序は転倒されており、富裕は勤勉な労働であるどころか、一か八かの投機の報酬である。わが国の貨幣および金融制度 (monetary and borrowing system) がつくり出している数多くの弊害のうち、勤勉な職業から多数の人々を除去することほど大きな弊害はない、というのは、かれらは商人という名目で、もろもろの詐欺や策略を弄して、市場の転機や、公債価格の騰落を利用して稼げることを頼みにしているからである。」(pp. 176—7) 25年恐慌時にみられた南海泡沫以来といわれる、投機の襲来<sup>(25)</sup>がホジスキンの眼に焼きついていたのであろうか。ここで「トレード」と「インダストリ」が、このような現実を反省する概念として用いられていることのうちに、ホジスキンの小生産的な階級的立場が表明されている。

それにしても、ここで貨幣、信用現象に大きな関心が払われているのであるが、さらに節を新ためて、ホジスキンの貨幣、信用についての見解を聞いてみよう。

### 第3節 「共存する労働」と貨幣・信用

これまでみてきたように、ホジスキンの理念である分業は、内部に不可欠な

ものとして「トレード」を組み込み、現にある「労働者の貧困と難況」を判断するための基準とされていた。一面では倫理的な基準であるが、さらにホジスキンは穀物法、租税、通貨、物価といった、資本制生産の市場機構にふれてゆかざるをえない。

これらがいり混って現象している価格の現状を次のように把握する。「不幸なことに、全商業は立法によって強く規制されているので、現実のあらゆる貨幣価格は社会価格 (social price) を表わすことになっている。そして不幸なことに、インダストリとトレードは社会的規制によって非常に阻害されているので、われわれはあらゆる物の自然価格が必然的にどの程度下落するかについて考えることはできない。」(p.232) と。そして、この「自然価格」を「必要価格」(necessary price) ともよび、これは「自然が人間に要求する労働の全量を意味する」(p.219) とのべ、「社会価格」とは、「社会的諸規制によって高められた自然価格」あるいは「労働者に対して増大された自然価格」(p.220) であると説明されている。ここで「自然価格」とは自然と人間との物質対象で、人間が自然支払う労働とされ、理想状態で価格<sub>(26)</sub>とされる。これにたいし、「社会価格」とは「自然価格」の歪められた価格にほかならないが、ホジスキンは、この「社会価格」の要因として、穀物法や、政府の各種の法制的規制、資本家が労働者から収奪すること ( $G - W \cdots P \cdots W' - G'$ )、さらに他のところでは所有が利子を生むこと ( $G \cdots G'$ ) があげられている。この点、ホジスキンは資本関係それ自身が生み出す幣害と、利子生み資本および第二次的な政府による規制の生み出す幣害を同一次元で批判している。しかし、この区別を明確にしないままに、現実を反省しようと格闘しているところにホジスキンの過渡期の苦しみがあるといえるのである<sub>(27)</sub>。この「社会価格」を生み出す重要な要因として貨幣がとりあげられているが、ホジスキンはこの貨幣の現状を次のようにのべていた。

「政府紙券 (government paper money) と商業紙券 (commercial paper money) の両方が、われわれの時代に、はかりしれないほどの災害をもたらしてきたことを否定することは、狂気の沙汰である。われわれは名目価格が数年

の間に20%<sup>(28)</sup> 上下するのをみてきた。変動は、紙券貨幣の不適切な発行によってひきおこされてきた。債務は、ふやされたり減らされたりしてきたし、貨幣契約はすべて実質的に侵害されてきた。ある階級は、他の階級を富裕にするために欺むかれてきた。そして事業の全コースは通常の水路 (usual channel) から逸脱させられてきた。その結果、2年連続して一定の収入を得るものは、誰もいなかった。そしておそらく戦いに勝った敵によってふみにじられるか、あるいは何か大きな天災によって、大損害をうけたかした国でなければ、みることのできないような混乱、狼狽、恐怖が、この国では紙券貨幣の量および価値を変更することで年々ひきおこされてきた。」(p.213) 銀行制限時代のインフレ過程から兌換再開以後のデフレ過程を通しての流通上の混乱、特にホジスキンのことについて印象深かったと思われる25年の本格的な恐慌が、ホジスキンのこう言わしめたのであろうか。

ここで「はかりしれないほどの災害」の原因は「紙券貨幣の不適切な発行」すなわち「通常の水路」からの逸脱として把握されていることが目をひく。つまりホジスキンは「通常の水路」を想定して「紙券貨幣」の幣害を考察しているのであるが、この「通常の水路」とはどのような想定であろうか。その内容は、ホジスキンの貨幣、信用論の中に与えられている。

ホジスキンは貨幣を分業にともなう交換の技術的困難をとり除くものとして、「販売および購買の手段」(p.178) ととらえた<sup>(29)</sup>。彼はこの貨幣を「金属貨幣」と「紙券貨幣」に分けて説明している。「金属貨幣」については、基本的にはスミスおよび古典派の貨幣観を常識的にひきついでいる。すなわち、貨幣と富は区別され、貨幣導入の契機については、スカロックに従って、分割可能性、耐久性、小片に含まれる大きな価値、同一性、不変性が指摘され、金属はその内在的価値にもとづいて流通することが強調されている。「貨幣は立法の創造物ではないのだから、その量あるいは価値は法によっては規制されない。諸政府はこれらの事情に干渉するのだが、諸政府には全く無関係の、二つの自然的事情が存在する。すなわち、貴金属および他の諸商品を獲得あるいは購買

するために必要な労働の量と、ある与えられた時間および場所で遂行される交換の数は、いつでも他のすべての諸商品に対するこれら貴金属類の相対価値 (relative value)、つまりどれだけの貴金属の量が流通に存在しなければならぬかを決定する。(P.185)」 こうして、ホジスキンは「交換の数」に一致する金属流通を自然的事情としているが、貴金属の国際分配メカニズムについての説明はない<sup>(30)</sup>。要するに、ホジスキンの主張は、政府の干渉さえなければともに労働を体現している商品量と貨幣量は一致するはずであるということである。これはホジスキンの単純流通 ( $W-G-W$ ) の理念の下での貨幣論にほかならないが、ホジスキンは、この「相対価格」は「地代と利潤から等しく影響をうけている」、(P.186 footnote) としており、ここで「理念」は資本制生産における商品流通 ( $W'-G'$ ) によって論証されることになっている。労働を商品と同一視する経済学者の主張を誤りとしながらも、労働が富の創造者であることと、労働が価値の専一的な標準であることとを一元化するホジスキンの、労働の二重性が明かにされて明確となる単純商品流通と資本主義的商品流通との理論的区別は望むべくもない。アレヴィも言うように、「正統派経済学者たちと同様に、そしてこの時代イングランドにおいて、アトウッドの模範に従って象徴貨幣の制度を推奨した人々の見解に対立して、彼は、金属通貨の発明および撰択を、自然の諸法則に一致し、そしてどんな不公平を含まないものと考えた」<sup>(31)</sup> ののである。ホジスキンの「共存する労働」がもつ資本主義批判の限界が、ここにあらわれている。

それでは「紙券貨幣」についてどのような見解を示すであろうか。

スミスは「紙券貨幣」による「金属貨幣」の代替を資本節約の観点から推奨したが<sup>(32)</sup>、ホジスキンは、これを労働の節約の観点から進歩とみなしている。この紙券の充用は慣習にもとづくものとされ、理論的には究明されていない。

ホジスキンはこの「紙券貨幣」を「商業紙券」と「政府紙券」に分け、前者を「商業の目的で商人、銀行、小売商人たちによって発行される紙券」、後者を「政府によって発行され、規制され、管理される紙券」(p.197) としている。

まず「商業紙券」の方からみてみよう、ホジスキンは、この種類に、約束手形、為替手形、個人銀行券をとりあげている。

約束手形とは、長期の事業にたいして発行されるものであり、将来の商品生産というしっかりした基礎をもち、また為替手形も、外国貿易などの遠隔地の支払いをなす手段であり、商品の売買にもとづいているので、いずれも信用にあたらし、「貨幣と等しい価値」をもち、転々と移譲され、「貨幣の全機能を果たす」と彼は説明している<sup>(33)</sup>。要するに商品売買にもとづいていれば、「信用にあたらしめる」というのである。ここで「信用」は単純商品流通 $W-G-W$ の次元で規定されている。さらに銀行券については、これを地方個人銀行の銀行券に限定した上で、「有用な事業に従事している人々にたいして、貨幣や資本を供給する主要な仲介者」(p.206)としてこの役割を高く評価し、これを「協同生産の自然的体制」(natural system of co-operative production)の最も進歩したものおよび、この銀行の振り出す手形である銀行券は、「一般的信用にあたらしめる交易者である、特別な階級の約束手形」(p.208)であり「一覧払いである」点で約束手形よりすぐれており、大きな額の商業手形を割引いて自分の信用を貸付けすることで、「トレイド」が助長されるとされている。このようなホジスキンの説明は、産業革命推進中、客観的には資本蓄積を押し進めた地方個人銀行の活動を肯定してなりたつものである。

ホジスキンは、この銀行の一般的信用を地方個人銀行の地域での高い信用に帰している。保有する預金にふれてはいるが、それが支払手段となることの意義、つまり兌換の社会的意義は無視されている。ホジスキンのよれば「取引される事業の量と流通している貨幣量の関係の変更によってひきおこされる、価格のすべての変動を不断にを防止する」のは、地方銀行の真正手形割引による発券であり、この発券は「どの会社 corporation も、排他的な特権をもつ立法府によって援助されないで、その発券が自由に許され、あらゆる銀行の発券が、競争銀行の用心深さによって抑制され、統御される場合」に「通常の水路」を流れるというものであった。ここでスミスやソーントンにおいて、客観的、構

造的な意義をもっていた<sup>(34)</sup>、「スミスの原理」（真正手形理論）が、ホジスキンのあっては過剰をひきおこさないため 予定調和の論拠とされている。つまり、 $W-G-W$ に基礎づけられた手形を割引くのが銀行券であるから、過剰はありえないと推論していくのであるが、ここでホジスキンの予定調和の理念は、客観的には資本蓄積をおし進める機関にほかならない地方個人銀行によって論証されているのである<sup>(35)</sup>。とわいえ、ホジスキンの墨守する地方個人銀行は、やがて株式預金銀行によって、とって変わられるような、マニュファクチュア資本のための銀行であることは注意されなければならない<sup>(36)</sup>。

ところで、イングランド銀行およびその銀行券は、「商業紙券」から外されていた。ホジスキンはこれを、国庫証券や不換の国家紙幣と同様に「政府紙券」とみなしたのであるが、その一つの論拠に「わが国では政府は銀行の基金を借入れたのちに、その紙券を法貨にする法律を通過させ<sup>(37)</sup>、それを正貨支払いの責任からのがれさせている」(p.197) ということをあげている。しかしホジスキンの時代には、兌換が再開されていた、とすれば、ホジスキンは兌換を基準として、イングランド銀行券を「政府紙券」とみなしているのではないようだ。銀行制限時代のイングランド銀行の専制的行動の記憶が、ホジスキンをそう言わしめたのであろうか。しかし、イングランド銀行を「政府紙券」とみなしたより大きな要因は、局地的にではなく全国的に襲った25年恐慌の経験である。これについて、彼は「たとえば議会記録によれば、イングランド銀行の発券は、1792年以来3倍の量になったが、一方地方銀行の発券量は、先の1825年末の激変の直前には1807年よりも400万少なかった。巨大な災害をひきおこすことができるのは、巨大な力にほかならない、そして、もしあの激変およびそれに伴う難況が、ある程度紙券貨幣によってひきおこされたとすれば、それは非常に巨大で、かつ激烈であったので、これらをひきおこすことができたのは、ほんの数ヶ月の間に発券量を6分の1に変えた、イングランド銀行の巨大な力そのものにほかならない。」(p.216) とのべている。

つまりホジスキンの「政府紙幣」は、恐慌との関連で概念されてお

り、彼はこれを「通常の水路」という理念 ( $W-G-W$ ) が政治権力＝イングランド銀行によって  $W-G'-W$  に歪められている事態であるととらえられ、その結果、恐慌の帰結としてのイングランド銀行の収縮が、恐慌の原因ととりちがえられ、イングランドの私信用が公信用と混同されたのである<sup>(38)</sup>。

これまでみてきたように、ホジスキンの貨幣、信用論は、生産と消費の対立、需要と供給の不一致、市場の混乱、景気変動といった資本制生産の生み出す現実の矛盾に対して、これを反省する理念として構想されていた。が、これを現に資本蓄積をおし進めている主体の活動により論証するという限界を含んでいた。以上ホジスキンの「共存する労働」は、貨幣、信用の吟味にまで立至らなければ明確にならないような、歴史的、具体的内容をもっていたのである。

### む す び

以上みてきたように、ホジスキンの「共存する労働」論は、マニユファクチュアからファクトリへの移行期、資本制生産が本来的に生み出す「労働者の貧困と難況」があらわれながらも、なお階級的流動状態を残す段階に身をおき、この「労働者の貧困と難況」を「製造業者、商人、銀行家の自由な結合」という理念によって克服せんとするものであった。換言すれば、まさに労働の二重化過程に身をおきながら、この克服を熟練職人、商人、銀行家の「共存する労働」理念の中に求め、職工教育によってこれを実現しようとしたのである。この「共存する労働」は、一面では社会学的な階級の把握というよりも、E・P・トムソンによって「産業革命の偉大な精神的成果」としての「集合的意識」とよばれた、階級意識あるいは階級文化<sup>(39)</sup>ともいうべき内容のものであり、この階級意識は30年代に大きなうねりを生み出すチャーチズムの精神的起源ともなりえたものとして高く評価できるが、と同時に、他面、ホジキン自身が資本制生産条件の変化の中でその後忘れられてゆく原因も、資本を事実上容認してゆく「共存する労働」の把握の中に含まれていたのである。しかし、人間的進歩を経済

的進歩と結びつける改良の見地は、資本主義が自由競争から独占的段階に移行する時期や、さらに高度の段階へと移行する過渡期に、異なった条件の下で、J・S・ミルやフェビアン社会主義の思考の中に、うけつがれてゆくのである。

<註>

- (1) ホジスキンの伝記として、Élie Halévy, Thomas Hodgskin, edited in translation with an introduction by A.J. Taylor 1956 がある。
- (2) 平尾 敏『リカード派社会主義の研究』ミネルヴァ書房1975年、王野井芳郎『リカードウからマルクスへー古典経済学批判史』新評論1954年、この系列に属するものとして蜷原良一『古典派資本蓄積論と労働者階級』法政大学出版局1974年のそれぞれのホジスキンの章、および鈴木鴻一郎「トマス・ホジスキンの『経済学説全集』第4巻、河出書房1955年、神代光朗「トマス・ホジスキンの資本観」『三田学会雑誌』第61巻第8号1968年、E.K.Hunt, Value theory in the writings of the classical economist, Thomas Hodgskin, and Karl Marx, History of Political Economy, Vol. 1—9. No.3, 1977などがある。
- (3) ホジスキンの労働全収権思想に注目するものとして、A.MengerのDas Recht auf den Vollen Arbeitsertrag in Geschichtlicher Darstellung, 1886のFoxwellによる英訳の付録、白井 厚、野地洋行「トマス・ホジスキンの『労働擁護論』」、『三田学会雑誌』第51巻第9号1958年の研究がある。
- (4) この系列に属するものとして、鎌田武治『古典経済学と初期社会主義』未来社1968年第3章、安藤悦子「トマス・ホジスキンのドイツとイギリス」『経済科学』第10巻第3号、1963年、同「イギリスにおける労働者教育運動の成立」『歴史学研究』第272号1963年、W. Stark, The Ideal Foundation of Economics Thought, London 1943. 杉山忠平訳『経済学の思想的基礎』東洋経済新報社1960年、E.Lowenthal, The Ricardian Socialist, New York, Colombia University Press, 1911 [Kelley's reprint. 1972] があげられる。
- (5) 鎌田、前掲書、150 ページ
- (6) 毛利建三「産業革命・フランス革命・ナポレオン戦争」杉原編『講座経済学史』同文館1976年31ページ
- (7) 安川悦子「イギリス産業革命の労働者」『福島大学商学論集』第34巻第1号、1965年54—6ページ
- (8) Halévy は、平和回復後と20年代の危機の時代の公衆の態度を比較し、「今では誰も政治を語らない、彼らは銀行、紙券貨幣、自由貿易、穀物法廃止よりほか

- には語らなかつた」とのべている。History of the English People 1815—1830. p.235
- (9) ホジスキンは、これを Article, Politica Economy in Supplent to Encyclopædia Britannica 1823 から引用しているが、キャンナンは、この論文が「資本も労働する」という見解を示した最初であると指摘している。Cannan, A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848, 1917 pp.208—9)
- (10) K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Werke, Band 26, Diez, 1968Bd.3, S.261 岡崎他訳『剰余価値学説史』第3巻(大月版マル=エン全集26, III 1973年) 348ページ
- (11) 資本制生産の内面分析に発する古典派経済学は、この時期に生起する社会的な諸問題に対処するなかから、次第に流通論的、政策論的色彩をつよめ、労働価値説にかわって生産費説から需給説が、利子理論においても貸付利子説にかわって資本利子説が抬頭してくる。杉原教授の言葉を借用すれば、ホジスキンの利潤起源論に通じる労働全収権の主張は、この転換点において利潤権利論(資本生産力説、危険負担説、制欲説)に対決するものであった。杉原四郎『イギリス経済思想史』未来社1973年38—9ページ、Cf. Ronald L. Meek, The Decline of Ricardian Economics in England, Economics and Ideology and Other Essays—Studies in the Development of Economic Thought, London, 1967. 高木暢哉『利子学説史』日本評論社 1942年 第2編第1章、2章参照
- (12) この点でコンディヤック、コンドルセに通じるものがある。スタークも、マルサスの静態的、唯物主義的な見解にたいし、ホジスキンの考え方は動態的であるとのべている Stark, 邦訳129ページ、またアレヴィも、マルクスおよび、H・スペンサーの無政府的な進歩観と結びつくことを指摘している。Halévy, tras. ibid. p.171.
- (13) 序章、「経済学の目的と範囲」に続き第1～3章が知識・労働論、第4～6章が分業論、第7章トレイド、第8章貨幣、第9章価格、第10章資本蓄積の諸影響、の篇別構成になっている。
- (14) 「改良」のために国家のしくみを利用することを拒否しており、ベンサムとは対照的である。Stark, 邦訳121ページ
- (15) スタークは「かれの実践哲学へのかぎを提供するのは、かれの国家論ではなく、かれの発展論である」邦訳127ページとのべ、この「進化の原理」はNewman Essays on the Development of Christian Doctrine 1845. Dawin, Qrigin of Species 1859 に先だつとしている。「科学と産業」を推進基軸として「新キリスト教」を構想したのは、サン・シモンであったが・スタークはアレヴィンがサン・シモンのホジスキんに与える決定的な影響に気づかなかつたとのべている。Stark 邦訳119ページ

- (16) ホジスキンの「人為」 artificial と「自然」 natural を対照させる場合、否定的原理に歴史主義が適用されているというローゼンベルグの指摘は示唆に与っている。ローゼンベルグ直井, 広島訳『経済学史』(ナウカ社 1935年 453ページ)
- (17) ホジスキンは「知識」の生産力におよぼす影響について、消極的な論者としてマカロックを、積極的な論者として、J. B. セー、レイヴンストーンをあげている。p. 54, 77
- (18) 内田義彦, 増補『経済学の生誕』未来社 1972年231—42ページ参照
- (19) 彼は工作機械、動力機械が鉄工業、綿工業に採用される段階に身をおいてのべているのだが、機械の導入について、まず「仕事の複雑化」と考え、その過程で少数の熟練労働者以外は、いったん排除されるが、社会が進歩すれば、この「複雑化」は「単純化」に変わり、多くの労働者が就業することが可能になるとし、人口増加＝生活資料増加の根拠としている。(p. 128) この点ホジスキンの機械論は補償説に近い。
- (20) 徒弟法は19世紀初頭あいついで廃棄され1814年には最終的に廃棄された、戸塚秀夫『イギリス工場法成立史論』未来社1966年、251ページ
- (21) 「共存する労働」を「絶対的価値」におきかえれば、プルードンの所有批判と同じ論理構造をもっているが、ホジスキンは、機械過程の「協同」ではなくて、独立した小生産者的な労働者の「共存」を内実としており、プルードンとの歴史段階の違いを示している。佐藤茂行『プルードン研究』木鐸社1970年207—16ページ参照
- (22) 鎌田, 前掲書137ページ、神代「トマス・ホジスキンの生産力論」同108ページ。
- (23) ホジスキンは、オーエンの「共同社会」でも、分配に従事する人は必要であるという論法で商人を擁護している。(p. 150)、オーエンの商業批判については、永井義雄「イギリス社会主義——俗流経済学者としてのロバートオーエン」内田他編『経済学史講座』2, 有斐閣, 1965年, 18—9ページ
- (24) 岡 茂男『商業擁護論』未来社1965年, 280—1ページ
- (25) cf. C. B. Hunt, The development of the business corporation in England, 1800—1867. Cambridge, 1936 chap. III
- (26) E. K. Hunt, ibid. p. 336.
- (27) 「社会価格」と「自然価格」のホジスキンの理解には、「スミスの見解における正しい点と、混乱した点および混乱させる点と、ともに繰り返されている」K. Marx, Theorien, Teil I. Werke Dietz, 1965 S 60 前掲書, 第1巻(全集26—1) 75ページ
- (28) 物価水準は、1790年を100として23年113, 24年106. 25年118, 26年103であった。ホジスキンの数字は局地的でなければ感情的な数値である。cf. Jacob Viner,

Studies in the Theories of International Trade, 1923. p. 179

- ②⑨ この貨幣把握の古典経済学との共通性については、K. Marx, Zur Kritik der Politischen Ökonomie, Dietz, 1970, S. 48 マルクス『経済学批判』岩波文庫56ページ参照
- ③⑩ 貨幣名称であるポンド、ルーブル、フローリンと貴金属の価値を区別しており (p. 193) ホジスキンは価格標準の事実上の把握がみられる。
- ③⑪ É. Halévy, *ibid.*, p. 109
- ③⑫ 中村広治「スミス貨幣・信用理論の研究」『大分大学経済論集』第16巻, 第1~4号参照 A. Smith, The Wealth of Nations 1776, modern library ed. 1937. p. 276, 303. 大内訳『諸国民の富』岩波文庫① 262, 304ページ
- ③⑬ 10 ポンド以上の内国為替手形がイングランド銀行券とともに利用され, またヨークシャーやランカシャーといった製造業地域では大半の手形が3ヶ月の期間であることといった知識を A letter to the Right Hon. G. Canning, &c. &c. By Henry Burges Esq. から得ている。(p. 203),
- ③⑭ 高木暢哉『信用制度と信用学説』日本評論社1959年第9章, 中村広治「ソオントン『紙券信用論』研究」『大分大学経済論集』第10巻第2号参照
- ③⑮ この地方銀行を全国的に結びつけるものとして手形交換所を高く評価している。(p. 208)
- ③⑯ ホジスキンの時代には銀行券は利子つき, 期限つきのものから, 要求払いに発展しており, 地方銀行は預金銀行取引と発券銀行取引を未分化のまま, マニユファクチュアという狭隘な生産基盤をもち, 農村や工業地域における家内工業的な個人企業のための運転資金を供給し, その賃金所得流通に介入する一方, 大額の商業取引はロンドン宛の為替手形やロンドンで支払われる, 大額の銀行手形を介して, ロンドンの預金銀行, イングランド銀行に依存していた。近代的な銀行業の体制である地方銀行—ロンドンの銀行—イングランド銀行の体制が形成されつつある過渡期に, ホジスキンは身をおいている。荒牧正憲「貨幣制度の展開と通貨論争」『熊本商大論集』第6号, 16—17ページ参照
- ③⑰ イングランド銀行券の法貨規定は1833年の銀行法による。1797年の制限条例は兌換停止の規定であり, これは当初期限がつき, つぎつぎに更新された。
- ③⑱ イングランド銀行は流通の外にある貨幣を動員して恐慌に対処した(A. Andreadés, Histoire de la Banque d'Angleterre, Paris, 1904. 町田, 吉田訳『イングランド銀行史』日本評論社1971年295—6ページ) 点で, ホジスキンは別の次元で, イングランド銀行券は, 私的な信用手段から公的な流通代用物になろうとしていた。
- ③⑲ 都築忠七編『資料イギリス初期社会主義——オーエンとチャーチズム』平凡社1975年136ページ, ここで階級と階級意識の位相が注意されねばならない。